

# 増え続ける中国人留学生に対する教授法対策

—— 『高等教育クロニクル』の記事より ——

宮 田 実 (訳) †

Colleges Help the Faculty Adapt Teaching for Foreign Students

—— An Article from *The Chronicle of Higher Education* ——

Translated by MIYATA Minoru

## ニューウェル氏の戸惑い

アイオワ州立大学のジェイ・ニューウェル准教授が担当する「広告学入門」は大教室での講義であるが、彼には学生たちが自分の講義に満足しているという自信があった。ところが数年前、教室の中に無反応で退屈している学生が少なからずいることに気づいた。彼は、なぜそのような学生がいるのだろうかと思議に思った。よく調べてみると、そのような学生にはある共通点があった。彼らは外国人留学生であり、そのほとんどは中国からの留学生であった。彼らの多くはこの大学に入学して1年になるが、彼らの英語力はかなり早口のニューウェル氏の講義を理解するには不十分であった。ニューウェル氏は「彼らは私の講義がほとんど理解できなかったに違いありません」と言う。

ニューウェル氏のこのような経験は決して珍しいことではない。過去10年間でアメリカの大学への留学生の数は約75%も増加した。特に、アイオワ州立大学ではこの10年間で2倍以上になっている。急激な留学生の増加によってアメリカの大学の教室は国際色豊かになってきている。各大学は、教員もこのような新しい学生群のニーズを考慮した授業を展開する必要があると考えている。即ち、授業のレベルを低下させないで、しかも留学生たちにわかりやすく講義する方法を模索しなければならないのである。ニューウェル氏

---

† 大阪産業大学 教養部 教授

草稿提出日 7月4日

最終原稿提出日 7月4日

は「私は学生たちが私の講義内容を十分に理解してそれを応用する能力を身につけることを願っています。もし留学生たちが理解できなければそれは彼らの問題であると同時に私の問題でもあるのです」と言う。

### さまざまな留学生対策

現在アメリカで学ぶ留学生数は100万人近くにのぼる。この数字は過去最多であり、また数十年前とは違い留学生のほとんどが大学院生ではなく学部生なのである。このような留学生の低年齢化によってこれまでとは異なる問題が起きている。北米で数多くの英語学校を持つ ELS 教育サービス社による 2015 年のアンケート調査によれば、留学生の約半数が最大の悩みとして英語力不足を挙げている。教室でのディスカッションやグループワークについていけないと言う留学生もかなり多い。

大学院では専門分野の研究者との少人数学習が多いが、学部生は大人数の一般教養クラスを受講することが多い。即ち、より多くの教員が留学生を担当することになる。ニューウェル氏が教え始めた 15 年前、人気の選択科目である「広告学入門」の教室にはほんの少しの留学生しかいなかったが、今では受講者全体の 10% を占めている。ポートランド州立大学で英語を担当しているアニー・グリーンハウ氏は「教師たちはカルチャーショックを受けています。彼らはずっと同じ場所で教えていますが、学生たちが変わったのです」と言う。

この問題は決してアメリカだけのものではない。国際教育担当者協会 (AIEA) の理事であり異文化教育の専門家であるダーラ・ディアドルフ氏はヨーロッパやオーストラリアの大学で、留学生の多いクラスでの教授法に関する講演を依頼されることが多い。彼女は「この問題は緊急の課題で、アメリカに限られたものではありません」と言う。

2011 年の暮、チャールズ・キャラハン氏はパデュー大学の助教授として「家族論」を担当していた。その頃パデュー大学でも外国人留学生が急激に増えていたのである。彼はある日、副学長室に呼ばれた。そして、大学の教授法改善センターへの異動を告げられた。同センターでは急増する留学生教育を支援するためのプログラムが開発されていた。

パデュー大学では教員がクラスの異文化度がわかるデータを作成しているが、キャラハン氏の提案は極めて明快である。彼がすべての教員に配布した文書には以下のような具体的な方策が記されている。専門用語を使わない。学生が自宅で自分のペースで復習できるように講義で使用した提示資料やレジュメをオンラインで提供すること。盗用やカンニングが心配ならシラバスに明記するだけでなく初回の授業できちんと説明すること。授業で強く伝えたいことを繰り返し述べること、特にテストの前に。課題を出す時は正解例と不

正解例を示すこと。

インディアナ大学－パデュー大学インディアナポリス校のアカデミック英語プログラムの責任者であるエステラ・エネ氏は、グループワークの時はアメリカ人学生と留学生の混成チームを編成することを提案している。また、ストーニーブルック大学の教務副部長のジュン・リュウ氏は、ゼミのようなディスカッション中心の授業の場合は事前に扱うテーマを学生に周知させることが重要だと言う。そうすることによって留学生に準備の時間を与えることができ、自信を持たせることができる。中国生まれで異文化コミュニケーションが専門のリュウ氏は、教員に授業後数分間教室に留まることを勧める。中国からの留学生は自国での経験から、授業中に質問をして講義を中断させることはいけないことだと考える。また、つたない英語で他の学生がいる場で質問することは恥ずかしくてできないものである。リュウ氏は「留学生にとって授業後の教員との数分間のやりとりが個人的なつながりを持つうえで重要なのです」と言う。

アイオワ州立大学のニューウェル氏は教室で使用する提示資料やシラバスに中国語訳をつけることにした。また、提示資料にアメリカ以外の国の広告例も入れることにした。アメリカ人学生の中には、中国語を学ばなければいけないのかと不平を言う者もいるがそれはごく少数である。

## 対策と教育の質

20歳のワン・シャオユーさんは中国からアイオワ州立大学への編入学生である。彼女はニューウェル氏の中国語訳は役に立っていると言う。しかし、ニューウェル氏のそのような努力がより重要なのだと考える。彼女はまた「ニューウェル先生は中国からの学生やその文化に関心を示してくれています。私はその点が立派だと思います」と言う。

ニューウェル氏は留学生に対する教授法に関するワークショップを定期的実施している。このような試みは多くの大学で行われるようになってきた。ニュージャージー州のセントナリー大学では定期的にランチミーティングが開催されている。そこでは世界の特定の地域や文化の専門家が講演をする。最近大学の認証評価を再度取得したばかりのノースカロライナ大学グリーンズボロ校ではFD活動の一環として留学生に対する教授法を取り上げた。オハイオ州にあるケースウェスタンリザーブ大学では新学期が始まる頃、留学生の名前の正しい発音に関するセミナーが開催されている。留学生課の課長であるモリー・ワトキンス氏は「中国をはじめとするアジアからの留学生たちは自分の名前を正しく発音してもらえないので英語名を使う人が多くなりました。セミナーでは教員は留学生の名簿を持参してそれぞれの名前の読み方のコツを知ることができます」と言う。

大学によっては留学生に英語を教える教員に対して留学生の学習上のさまざまな相談に乗るという役割を負わせているところもある。ミシガン州立大学では英語センターの職員がチームを作って、教員の要請を受けて教室に入り、授業を観察し留学生に対する指導のアドバイスをしている。ポートランド州立大学で英語を教えているグリーンハウ氏は、新入生の必修科目である「新入生ゼミ」を受講する留学生のための補習授業を担当している。彼女は少なくとも週1回、授業外の時間に留学生に授業を理解する方法やディスカッションでの意見の述べ方などのアドバイスをしている。彼女は個々の留学生について教員からの相談を受けることもある。

教員の中には留学生が増えすぎて教室の雰囲気が変わってしまったと不平を言う者もいるが、本紙がインタビューした教員のほとんどは、留学生に対する教授法を改善しようと努力することには抵抗はないと答えている。国際教育担当者協会のディアドルフ氏は「確かに教員の中には、ここはアメリカなんだから留学生もアメリカのやり方に従うべきだと言う人もいます。しかし、出身地がどこであろうと学生の学び方は多様なのです。そして授業用の提示資料をオンラインで提供したり、具体例をわかりやすく提示することなど留学生に対してうまくいっていることはアメリカ人学生にとってもいいことなのです」と言う。ディアドルフ氏は最後に「教授法を変えようと言うことは決して教育の質を落とすことではありません。また、評価の基準を下げるということでもありません」と締めくくった。

(2016年5月13日号)

(Copyright 2016. *The Chronicle of Higher Education*. Translated and reprinted with permission.)

## 訳者あとがき

本稿はアメリカで発行されている高等教育に関する週刊専門新聞『高等教育クロニクル』に掲載された記事の翻訳である。筆者はカーリン・フィッシャー氏である。

テーマは、アメリカで急増している中国人留学生の英語力不足である。大学院留学が一般的で留学生数も少なかった時はそれほど表面化する問題ではなかったが、学部レベルで中国人をはじめとする外国人留学生が急激に増えたことによって授業についていけない学生が増えたのである。

一般的にアメリカの大学で学部の授業を受けるためには各大学に併設されている ESL

（第二言語としての英語教育）を受講して、一定のレベルをクリアする必要がある。しかし、留学生の数が多すぎると、ESL 修了者でも学部の授業についていけない者が増える可能性は高くなる。本稿ではこの問題に真剣に取り組んでいる大学の具体的な対策例を紹介している。今後中国からの留学生はますます増えることが予想され、この問題に直面する大学が増えるだろう。

日本でも同様の問題が起きているに違いない。日本政府は留学生の受け入れに積極的である。2020年までに留学生数を30万人に増やす計画を発表した。日本学生支援機構の調査によれば、2015年度の外国人留学生総数21万人の内、高等教育機関の在籍者数は15万人余りである。その約半数は中国からの留学生である。大学別にみると1位は早稲田大学で約4000人にのぼる。大阪産業大学は2005年からしばらく全国ランキング第4位であったが、2015年時点では第17位（約1100名）である。留学生は正規の授業を受けながら外国語としての日本語の授業を受けている。正規の授業においては本稿で取り上げられたような問題があることは十分考えられる。日本語による講義が十分理解できない留学生に対してはさまざまな工夫がなされていることと思う。今後増え続けるであろう外国人留学生に対する手厚い対策を期待したい。